



第24号 2009年9月24日



◎今号の質問者

加藤多美さん (火曜教室)

【質問】韓国では「키가있다」「키가없다」といっていい方をしますよね。踊りを踊る際にも「キ」がなくてはいらない、ということはいわれるのですが、一体どういう意味なのでしょう。日本語でいう「気」とは違うのでしょうか。

——「キ」がある「という言葉はうまく訳すのも難しいですね。」粹だ「華がある」踊り心がある「……。どれもじっくりきません。」

趙寿玉 韓国の辞書には「演芸に対する才能や素質を表す言葉」と書かれています。一般的にいわれていることよりも、ここでは深く、また

見せる気、やる気、踊る気があってこそ

広い意味で考えたいと思います。韓国舞踊における「キ」は、踊りたい気持ち、そして踊りを表したい気持ち、そういったものがすべて「キ」となると思います。一言で説明するのはとても難しいのですが、敢えていうならば、その人のオーラが出た状態といえると思います。たとえば一世のハルモニ、ハラボジが踊っているときの何ともいえない楽しそうな顔からも「キ」はあふれています。あらゆるものから解放されて、私の踊りは最高と興じることができるとき、神明が表れるというのでしょうか。そういったものです。あとは、幼い子供たちが好奇心にあふれた表情をするとき、「キ」が満ちているな、と私は感じます。そこまで考えなくても、人々は子供のそういった表情に惹きつけられるものです。踊り心という「キ」もそれと似ていて、踊りたいというエネルギーが満ちていて、周囲もそこに自然と引き込まれるようなものです。

——「キ」は「出そう」と思っ出てくるものなのでしょうか。

趙 もちろん、敢えて出そうとする踊り手もいます。また表面にわかりやすく表れる方もいます。特に表現しやすいのは顔、つまり表情でしょうね。しかし自己顕示欲が激しいとあざとくなります。「自分を見てほしい」ということから出る「キ」も、もちろん大事ですが、あざとさだけが残ると見てくれだけの、単に目立つだけの「キ」になってしまいます。私は一目で見えるようなものではなく、いつの間にか見る側が虜になっ



撮影◎富永光昭

「いつの間にか見る側が虜になっているような「キ」を出したいと心がけています」

ているような「キ」を出したいと心がけています。顔が見える前面より背中や後頭部分のある背面が大事だと思っっています。あざとさも内側から現れる表現も紙一重の部分がありますから、私自身も常に注意を払っています。「キ」というのは「ものにするもの」ではなく、表現する人に現れてくるものです。ですから「あの踊り手には「キ」がある」「早急な「키가있다」とは言いますが、「私には「キ」がある」(나에게는키가있다)」という風にはいいません。——無くてはいけないけれど、わざとらしくてもいけない、ということですね。それはなかなか難しいそうです。

から離れてしまっています。韓国で生まれ育った踊り手は文化の違いからなのか自然と「キ」ができてきやすいのですが、しかし、「チュムパンの会」の生徒さんたちは日本で生まれ育った方がほとんどなので、その点が難しいようです。嬉しいのか悲しいのか、又しまいいはなぜ自分が踊っているのかわからないような……。ただ、最近の教室での宴席を見ていると、以前よりみなさんに躍り心がでてきたと思います。自然に踊ったり、リズムに乗ったり、「踊らずにはいられない」という踊り心がでてきたのでしょうか。

白みが分かってきて備わっていくというのがありますね。——特に新しく習う作品や難しい作品を踊る際は、頭で考えないといけませんよ。でもなおかつ、自ら湧き立つ心も意識するというのは、まるで右脳と左脳を同時に働かせているみたいですね。できるものなのでしょうか。

趙 踊りたいという気持ちから、心の底から踊りを楽しむ心が生まれ、そのうちに自らが解放されてこそ、自然な「キ」となり周りを魅了するものとなると思います。又、普段の生活では体験しない、作品などを習ううちにその持つ深さや、軽み、面

——元々、それぞれの人が生まれ持ったもののほかに、踊りを習得するうちに備わっていくものもあるのでしょうか。

趙 踊りたいという気持ちから、心の底から踊りを楽しむ心が生まれ、そのうちに自らが解放されてこそ、自然な「キ」となり周りを魅了するものとなると思います。又、普段の生活では体験しない、作品などを習ううちにその持つ深さや、軽み、面

白みが分かってきて備わっていくというのがありますね。——特に新しく習う作品や難しい作品を踊る際は、頭で考えないといけませんよ。でもなおかつ、自ら湧き立つ心も意識するというのは、まるで右脳と左脳を同時に働かせているみたいですね。できるものなのでしょうか。

趙 それはある意味で自分との戦いでしょう。「ここはこうしないと」という緊張だけでは、なかなか「キ」は出てきません。もちろん、作品を踊るなかでは、一つ一つのポーズや動作を意識して神経を行きわたらせることは必要です。しかし、習練していくうちにできなかった事ができたり、リズムや音楽と自分の呼吸や身体の反応がピタッと決まった時に、気持ちよくなる瞬間があるものです。そこを行ったり来たりすることで、踊り心も身につけてきます。きれいにカッコ良く踊るために頭で考えつつも、常に、動きたい、表現したい、ステップを踏みたいという、自分の心に耳を傾けて、クールになりすぎないことが大事だと思うのです。入門してしばらく経った生徒さんたちも、ある日、「キ」がでてくる瞬間があります。そういうエネルギーが出てくる方々には、教えていても楽しいものです。しかし、それ以上の「キ」をだすためには自分を磨く必要もありますよね。人の「キ」を見極める審美眼を養い、表現力を育てないといけません。感性を持っていても出し方がわからないと、ね。見せる気、やる気、踊る気があつた上で、そこから更に踊りを洗練させて人々をひきつけることが大事だと思うのです。

人と人をつなげるために

公演「天女ガ渡ル」を終えて 国井芳子



今年4月、東京・池上の實相寺で、渡来シリーズ「VOL.1」天女ガ渡ルが行われた。實相寺の縁あふれる庭で観る、趙寿玉の舞。馬頭琴やホーミー、アジエンといったエキゾチックな音色とのコラボレーションは、好評だった。

渡来シリーズ「VOL.1」天女ガ渡ルという企画はまず、實相寺という場と寿玉さんの舞、音はモンゴルの馬頭琴という条件のもとに生まれました。大きな舞台上で観る寿玉さんも素敵ですが、寿玉さんの舞は小空間にもピッタリ合うと思いますし、とても贅沢なことですよ。場所を小さな空間に変えてみると演者と観客の間に微妙な緊張感と臨場感が生まれます。私はこの格別な感覚が大好きです。ですからいつも場選びはとても大切なポイントの一つとして考えています。

寿玉さんの舞と場との融合は、實相寺

の佇まいと自然、季節(桜)と時間の流れ、アジアの音が一体となって現実から浮遊し、素晴らしい空間ができたと思います。観客はそれぞれのイメージを膨らませながら楽しめたのではないのでしょうか。

私は2年前まで芸術文化分野でのNPO法人アートブラネットの代表をしていました。ずっと切れ目なく多分野の

アーティストたちを紹介する企画をしていたら、いつのまにか溜まっている疲れにも気がつかず、それを友人に指摘された。このままではいけないと思い、思い切った充電させて頂くことにしました。この充電期間中、ヨガで体調を整え、たくさんのお話を聞かされながら私の中に軸ができ、私が見えなくなりました。

私の両親は台湾出身の華僑ですが、日本で生まれ育った私は、あまりそのことを意識してきませんでした。でもヨガに出会い体調が整ってくると、心も自然に原点に戻っていききました。アイデンティティを触発され、初めて中国語や台湾語を話せないことにストレスを感じるようになりまし。さっそく中国語を習い始めましたがそこで、言葉は文化だということに気付き、改めて日本語にも関心を

もつようになりました。そして自分の台湾の存在に気づいたんです。そうして台湾の見方が変わってくると、日本の見方も変わりました。

今、アジアは面白い。東アジアに位置する日本は島国であり、大陸から繋がるシルクロードの終着点でもある。たくさん文化が渡ってきて日本独自の文化が創られてきました。ある時、こういう話を椿座の松本貴子さんとしていて、日本に渡来してきた多様な文化をいろいろな切り口で紹介していく企画をしてみようということ、渡来シリーズが誕生したわけです。

私にとっての財産は人。柔軟な発想から生まれる企画を通じて人と人をつなげることです。お休みしている間に物質的、内面的整理ができました。結局アートブラネットは解散しましたが、志は変わることなくSai企画を立ち上げ、一年前の秋、「内なるものへ、誘いの響き」というチャンティングのヨガとインド音楽のライブをしました。

「天女ガ渡ル」はSai企画としては2回目のライブ公演でしたが、このライブを観た銀座ギャラリー悠玄のアートディレクター、佐藤省氏から悠玄でも是非踊っ



国井芳子
Sai企画所属、趙寿玉出演
「天女ガ渡ル」企画・実行者

てほしいと寿玉さんに声がかかり、新たな寿玉さんの挑戦が始まりました。7月11日の悠玄の公演は寿玉さんの舞を観た観客の熱気で一杯でした。終演後もたくさんの方から絶賛のメールやお手紙が届いたと省さんから連絡がきました。このような形で人と人が繋がっていくことが私の大きな喜びとなり原動力となっています。

寿玉さんの踊りを私が初めて観たのは松本さんが連れて行ってくれた日暮里で行われた公演です。韓国の舞踊も音楽も衝撃的で、でもずっと肌に入ってきました。寿玉さんは、凛とした姿が綺麗で、なかでもあの手が好きです。大きくて、踊るとしなやかで。そして古典舞踊という軸があるからこそ、新たな表現や実験にも積極的に挑戦していく、そんな柔軟な姿勢が素晴らしいですね。

これからも寿玉さんの持つ様々な引き出しの中から一緒に新しいことに挑戦していけたら素敵ですね。来年の渡来シリーズは、寿玉さんの舞と素敵なミュージシャンによって白梅の季節に實相寺で始まり、秋には続きを悠玄に繋げていくというまたちょっと面白い企画を考えておりますので楽しみにしててください。

それからすでに決まっているのが、今年の秋、11月3日に久良岐能舞台で行われる椿座公演「花」です。ここではまた新しい寿玉さんが観られると思うので、是非ひとりでも多くの方に足を運んでいただきたいと思います。(聞き手 柏木美奈)

オンニ

李 綾子



私が苦しい時、辛い時、とても会いたい人がいます。何か決断をせまられた時、道に迷った時、この人だったら、どうするだろうかと考えます。その人が、まさに趙寿玉オンニです。

私と趙寿玉オンニ（お姉さん）との出会いは、93年のソウル。留学していた頃、料理を教わりに行ったお宅でのことでした。寿玉オンニは、忙しい合間をぬって来られていたのだと思います。

私が舞踊を習いたい話をすると、なんと初対面の私を韓国人間重要無形文化財の李梅芳先生のところへ連れて行って下さったのでした。もちろん私の中では、「カルチャーセンター位で……。」と考えていたので、大きな戸惑いはありませんでした。

私が、そしてサルブリのスゴ、僧舞のチャンサムを、サルブリも僧舞も踊ったことのない私に準備して下さいませ。

いました。

先日、5月29日には京都・法然院で「滅紫月」、6月1日には、大阪中央公会堂で「詩人金時鐘をむかえて 詩と音と舞と」があり、寿玉オンニがゲスト出演されました。法然院では、京都という地域がかもしだす雰囲気があり、理香さんのカヤグム、金茂吉先生のコムンゴ、そして寿玉オンニの舞が、お互いを、ひきたたせながら、私達観客を引き込んでいました。

150名の小さな会場ですが、一つ一つの音、舞の奥深いところまで伝わってくるようでした。時鐘先生の公演は、詩、ジャズピアノ、パンソリ、舞と、それぞれ色の違うもののジョイントでしたが、その調和が非常におもしろく、時鐘先生の詩が重く重く心に響きました。両公演どちらも非常に素晴らしいものでした。

「춤은 사람은 마음이고 와야 된다(踊りを踊る人は心が綺麗でなければならぬ)」というのは李梅芳先生の言です。

踊りの中にその人が見えます。その人の性格が、そして今まで生きてきた人生が表れます。寿玉オンニの舞は、素朴でありながら、勇壮です。人間の大きさを感じます。そのオンニのおっしゃった言葉にも私が大切にしている言葉があります。「人は皆、使命を持って生まれてきてるんだよ。使命というのは、命を使うって書くんだよ」です。さて私は、これから命を使って踊ることが出来るんでしょうか？これが私の最大の課題です。

(イ・ヌンジャ)

公演情報

APPAN '09 横浜

公演日：9月28日・29日・30日

開演：18：30（開場 18：00）

会場：横浜関内ホール・小ホール

横浜市中区住吉町4-42-1

（電話 045-662-1221）

¥3,000

全席自由席（収容客席 250席ほど）

出演予定：コムンゴ（李世煥）、能（岡本房雄）他、インド・古典舞踊、インドネシア・古典舞踊、モンゴル・馬頭琴とホーミー、中国・京劇、沖縄・組踊りなど多彩なプログラムが予定されています。

趙寿玉はサルブリ舞での参加予定です。

お問い合わせ：045-332-4057 (TEL&FAX)

E-mail: f-m-o@jb4.so-net.ne.jp 岡本様まで

APPAN
-Asia Pacific Performing Arts Network-
Festival in YOKOHAMA
2009.09.28-29-30

18:00開場 18:30開演 横浜・関内ホール(小ホール)
全席自由 ¥3,000
発売場所：岡本房雄宅 Tel&Fax: 045(332)4057
協力：インテ政府 韓国文化院
マザーボート・アート・フェスティバル実行委員会
お問い合わせ：岡本房雄宅 Tel&Fax: 045(332)4057

新人さんコーナー

カルチャーシヨツク

〈匿名希望〉

時間ができたら韓国舞踊を基礎から習いたいとずっと思っていて、仕事に余裕ができたのを機に、宋和映先生のコムンゴ立舞のワークシヨツプでお世話になった縁もあり、木曜クラスに昨年の9月から通うことになりました。

ほどなく12月には「おさらい会」があると聞ききました。裏方として手伝う程度かと聞き流している、全員参加が原則！とのこと。手と足の基本を1年程で覚えて……との心積もりは見事に破られ、足の基本と扇舞を踊ることになり、自主練に都内の区民センターを転々とすることになる。

そしてこの間に、週1回ではとても覚えきれないことを悟り、昨年5月の発表会でも伝わってきた先輩方の熱気に直接触れ、早くあのようにになりたい、韓国舞踊らしさを出せるようになりたいと切望するようになりました。

経験のない回転や扇さばきもさることながら何よりも叩き込まれるのが呼吸。丹田に気を集めそこが司令塔となって呼吸に乗せて身体の内部から動くようにする。それから大サム・小サム



(※1)、ヤンウ線(※2)、静止することなく絶えず全身が踊っているようにと容赦ない。頭がパンクしそうでまるで身体が付いてきてくれないままに、おさらい会まで一気に疾走しました。

すべてが宿題として残っていますが、年明け早々にはもう今年のおさらい会は何をするのが話題に。漫然とではなく一年一年、目標を持って達成していく環境は、何事もだらだら続けてきた私にはちよつとしたカルチャー・シヨツクです。事情があつたとはいえ僧舞↓サルプリ↓立舞と、後から考えるとんでもない順番で始めて、ここ何年かはわずかに覚えている部分だけを自主練習するという韓国舞踊行脚も、こころ辺りで腰を据えられそうです。ノドル江辺(※3)、手の基本、チャデンモリ(※4)基本、短い散調を次の目標に、まずはひとつひとつの動作をヤムジゲ(きちんと、正確に)覚えて、いつかは自分の味、マツとモツ(※5)が出せるようになりたいと精進の日々です。

※1：強弱のこと ※2：中心から出る流れのこと ※3：民謡の題名 ※4：リズムと速度の種類の名前 ※5：マツというのは主に物質的な味。モツというのは精神的な味。簡単に言うと食べ物がおいしい時はマツ。舞台でいい味が出る時はモツ。ちなみに韓国語でおいしいは「マツがある」と表現して「マシイッタ」といい、格好いいは「モツがある」と表現して「モシイッタ」という。

活動報告

◎2009年4月18・19日(土・日)
境内アート小布施に参加
長野(小布施町)玄照寺にて

◎2009年5月29日(金)
IMF2009 韓国伝統音楽舞踊公演
「韓絃楽 滅紫月 vol.16」に出演
京都 法然院にて

◎2009年6月1日(月)
「原野の詩 詩人・金時鐘をむかえて
詩と、音と、舞と、」に出演
大阪 大阪市中央公会堂にて

◎2009年6月27日(土)
浅川兄弟講座1.
「韓国の衣を知ろう！」に出演
山梨(北杜市)高根改善センターにて

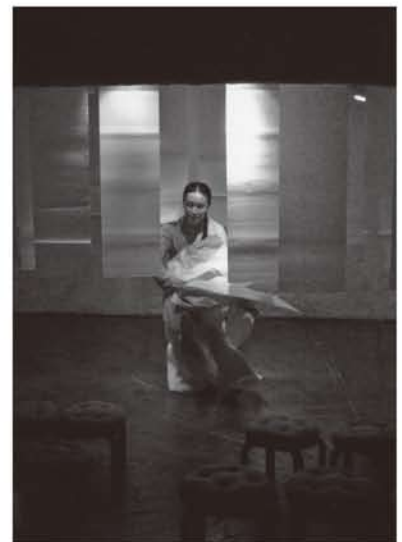
◎2009年7月11日(土)
「舞いライブ」を行う
東京(銀座)ギャラリー悠玄にて

今後の予定

◎2009年9月28日(月)
29日(火)
30日(水)
APPAN '09 横浜
神奈川(横浜)横浜関内ホール・小ホールにて
開演：18時30分

◎2009年10月3日(土)
秋夕
東京(小平)国平寺にて
昼と夜の部

◎2009年11月3日(火・祝)
椿座公演「花」
神奈川(磯子)久良岐能舞台にて



問い合わせ先：チュムパンの会事務局 03-3269-3258 趙富子